大阪天満宮社報
天満てんぢん
令和八丙午年
新春号外

年首御慶

大阪天満宮
1125
菅原道真公
御神退1125年
式年大祭

『行動する年』

大阪天満宮　宮司　寺井　種治

謹んで令和八年の新年を寿ぎ御皇室の弥栄と氏子崇敬者の皆様のご健勝とご多幸を祈念し、お慶びを申し上げます。昨年は大阪関西万博が開催され来場者は二千五百万人を超え、世界各国から又全国から多くの方々が来阪されました。会期中には日本の祭の紹介や神輿や地車などの披露もあり我が国の文化を世界に向けて発信する事が出来ました。万博関係者の方々に心からの感謝と敬意を表します。御皇室におかれましては悠仁親王殿下の成年式が九月に行われました事、誠にお目出度く慶賀の至りに存じます。また大東亜戦争終結八十年に当たり天皇陛下におかせられましては慰霊の為、硫黄島・沖縄・広島・長崎を行幸啓遊ばされました事にあらためて感謝申し上げます。また伊勢の神宮におかれましては、第六十三回式年遷宮のはじめの祭儀である山口祭・木元祭をはじめ諸祭儀が厳かに斎行されいよいよ本格的に式年遷宮が執り進められて行く事洵に御同慶の至りであります。また昨年は高市総理が誕生し、我が国初の女性総理なりました。「働いて働いて・・」という言葉が流行語大賞になりましたが、まさに命をも賭けて政権を担い日本の為世界に向けて力を尽くす姿は大変誇らしく益々の活躍を期待する次第であります。

さて本年は丙午の年に当たります。この年は新しい発展の芽が生まれ、又強いエネルギーを持つ年であると言われています。天神祭の燃え上がる篝火の炎と夜空に輝く花火のように華やかで活力のある素晴らしい年になりますよう御祈念申し上げます。

明年令和九年は菅原道真公がお亡くなりになって千百二十五年当たり、二十五年ごとの式年大祭の年になります。この年に向け昨秋より本社の御屋根葺き替え工事をはじめています。その他にも神具収蔵庫の建設など様々な記念事業を予定しておりますので氏子崇敬者の皆様方には御協力賜りますようお願い致します。

昨年の社報には「真」の字を書かせていただきました。様々な情報が溢れる中で真実を見極める事が出来るようにという思いでしたが本年は「活」と揮毫致しました。「生活・活躍・活力・活動・活発」など「生きる・勢いがある」という意味で積極的に行動して行く年にしたいという願いを込めました。来たるべき式年大祭に向け職員一丸となって取り組んで参る所存でございますので御指導御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

今年の干支
丙午（へいご）（ひのえ・うま）

昨年の干支「乙巳（きのと・み）」は、様々な抵抗にも負けず、古くからの風習にもとらわれず、新しい生活に向けての一歩を踏み出すべき年を意味していました。

さて、本年は「丙午」の年です。「丙午」と言えば、「この年生まれの女性は気性が激しく、夫の家に災いをもたらす」という俗信があり、前回の丙午（昭和四十一年）には、出生数が前年の四分の三に激減しました。しかし、この迷信にはなんの根拠もありません。

「丙」は、「一」と「冂」と「入」からなり、「一（はじめ）」は、陽気が伸びることを表し、「冂（かこい）」と「入」で、陽気が囲いの内に入ることを表しています。どんなに盛んな時であっても、衰える兆しが含まれていることを示唆しているのです。

「午」は、初めの二画で地表を表し、あとの二画「十」のうちの横線は陽気、縦線は陰気を意味します。すなわち、陰気が地表に出ようとする様子の象形です。

ですから、この「丙」と「午」を組み合わせた本年は、在来の支配的勢力が盛んに見えても衰えの兆しがあり、その一方では対抗する勢力が突き上げかねないという語義になります。対応の仕方次第で、その方向性が大きく変わるということです。

私たちの日々の生活においても、これまでの慣習的な生き方を続けるか、それとも、それを刷新するのか、慎重な判断が求められる年になりそうです。（安岡正篤大人の著書から）

令和八年元旦

大阪天満宮

博多人形ジオラマギャラリー「菅公一代記」のこれまで
―人形・展示ケース内部のクリーニング作業を機に

社報八十八号でもお伝えしたように、当宮の祭神・菅原道真公の一代記を「博多人形」の「ジオラマ」形式、十五場面に表わした人形ギャラリー（現在「菅家廊下」なる呼称が与えられる）のクリーニング作業を令和七年秋に実施いたしました。

◆これまでの経緯と変遷

そもそも、この人形ジオラマは、太宰府天満宮から譲渡されたもので、博多人形師の第一人者たる小島与一（一八八六～一九七〇）の作と伝えられています。

現在は当宮境内西側の梅香学院・駐車場の建物一階に設置されますが、以前は当宮の宝物収蔵館「流芳殿」（安岡正篤氏命名、昭和三十七年竣工、昭和六十一年取り壊し）に展示されていました。往時を実際に見聞された方も少なくなったものと推察します。流芳殿の写真資料等はほとんど見出せておらず、ご記憶、記録や情報をお寄せいただければ有難く存じます。

同ジオラマのこれまでの紹介は遺憾ながら不正確のきらいがありました（今もギャラリー入口に掲示の昭和六十二年の新聞記事に誤解を誘う箇所があり、後の不十分さにつながったと推測される）ので、社務日誌や関係者への聞き取り等から得られた経緯のあらましを記しておきます。

＊

社務日誌によれば、「人形ジオラマ」は昭和三十七年五月一日、日通貨物自動車で太宰府天満宮から当宮へ搬入、「流芳殿」は昭和三十七年十月竣工、十一月公開（主に正月と天神祭期間に一般公開）人形ジオラマ十五場面が流芳殿において他の宝物類とともに、展示の中心として公開されたことは、小冊子「天神さま」（刊行年不明ながら流芳殿展示説明が主目的。左図版）から推察ができます。

ただし昭和四十二年頃からは公開が滞った模様で、昭和四十七年八月

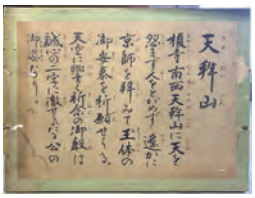
には、神庫の物品を移動。この時点で宝物公開施設の役目を終えた流芳殿は昭和六十一年九月解体。その跡地も含んで、昭和六十二年三月、現在の梅香学院・駐車場が建設。人形ジオラマは現状のギャラリーに移設、現在に至ります。

　再公開時の様子は、先述の新聞記事（讀賣新聞・昭和六十二年五月七日付）に紹介されています。

　その後、増村人形店による清掃・修復作業が施され（詳細は現在調査中）、下って令和三年にはギャラリー掲示の解説文の改訂がなされました（社報令和四年新春号外）。

＊

　令和六年、筆者は人形ジオラマと再会した折り、従来の場面タイトルと解説文の名称に齟齬がある不親切な状況、また「場面同定」にも疑念が生じたところでしたが、同年十二月、宝物調査中に「太宰府天満宮での解説パネル」十四枚が見出されました。（左図版はその一部）



　これによって、オリジナルの場面タイトル、当宮譲渡＝流芳殿展示時のその改変等、この人形ジオラマの興味深い問題点に気付くこととなり、当宮の信仰史における重要性を再認識できました。

◆「クリーニング作業」の実施

　こうした人形ジオラマの重要性に鑑み、積年の汚れや傷みで往時の雅趣の損なわれた現況を改善、より良い観覧環境の提供をめざし、ギャラリー全体のリフォームも検討しつつ、ひとまず人形と展示ケース内のクリーニング作業実施としました。

　作業には、国立民族学博物館等で当該分野で高い評価実績のある「文化創造巧芸」に依頼。同社の和髙氏、石井氏、専門スタッフによる全十五場面、五十数体の人形はじめ家屋や調度等、ケース内壁床天井にわたる「保存処理」が、令和七年十月八日から延べ二十五日実施されました。その保存処理は、「現状維持を基本とし、劣化進行防止のクリーニングと必要な補修」、具体的には、「堆積した砂埃等の刷毛や吸着ドライシートでの除去」、「人形衣類の湿式クリーニング」、「絵具層の膠による剥離止め」「紙剥がれの小麦澱粉糊での補修」「人形頭髪の小麦澱粉糊を用いた整え」等々の処理作業が実施されました。

　人形たちは見違えるように清浄さを取り戻し、表情には本来の輝きが戻ったと見受けられます。

◆太宰府天満宮からの絵葉書情報

　クリーニング作業が終了した直後、以前から依頼していたのですが、太宰府天満宮文化研究所からこれまで不明だった古い絵葉書が見つかったとの報が入り、それが当宮へ譲渡前のオリジナル状態を示すものと判明しました。その絵葉書と比較検討し、おそらく現在のギャラリーへの移設時に人形配置に混乱が生じたらしい箇所が散見しましたので、なるべくオリジナルに戻すという方針のもと、十二月八日に配置換えいたしました。

　そのうち重要な場面を記します。

・「道明寺の別れ」に叔母君を移動（先日まで「弓術」の場に居た）

・「配所の月」の菅公の位置を軒側に変更（月明かりに御衣を捧げる。床の水色の着彩は月光を示すもの）

・「幼少の菅公（二）」の観音様を下手の木立間に戻しました。

　同ジオラマは、当宮に譲渡時に、重要な変更がなされます。それは、

・天拝山↓讃岐守仁政（祈雨）

・博多濱の場↓大将軍社参拝、他

　これは当宮の縁起や見解に合わせた場面解釈の変更でした。こうした場面解説や変更の分析は今後ＨＰ等でご紹介できるようにいたします。

　同ギャラリーは新春行事等のため閉室中、一月下旬には開室します。輝きを取り戻し配置も少々変更した人形をぜひともご覧ください。

　リフォームとさらなる活用に向けてまだ道は半ばではありますが…。

（文化研究所 鈴木幸人）

春野恵子さんの創作浪曲『菅公伝（仮題）』

来年は、菅原道真公が薨去の後に天神様になられてから千百二十五年目の節目の年にあたります。全国各地の天満宮では式年大祭の準備を進めていますが、当宮でも来年四月に「菅原道真公御神退千百二十五年式年大祭」を斎行します。そこで、その一環として、菅公の物語を上方浪曲界の華・春野恵子さんに語っていただくことになりました。

御存じの通り、天神様は、史上初めて人から神になられましたので、従前の神々に比べて、多彩なエピソードが伝えられています。

そして、浪曲は神仏への願文・祝詞だったものが芸能化した「祭文（さいもん）」を起源としていますので、天神様の一代記を語るのにふさわしい伝統芸能といえるでしょう。そこで、寺井宮司が春野恵子さんを当宮にお招きし、その趣旨をお伝えしたところ、ご快諾を頂いた次第です。

脚本家の西村卓也さん執筆のシナリオは、すでに宮司の監修を終え、現在、恵子さんが節付けをされています。そのストーリーは、現代の天満宮での祈願風景に始まり、突如、平安時代に遡って、菅公の御生涯と天神になられた経緯を語り、再び現代の天満宮に戻るという興味深いものです。恵子さんは次のように話されています。

『宮司様のご依頼により、菅公の物語を語らせて頂きますこと、大変な光栄と受けとめています。全国には天神様をお祀りする神社が約一万二千社もあると聞きました。大阪天満宮だけではなく、各社にお招き頂き、菅公の伝承を浪曲で語り広められたら、と夢見ています。』

今後の公演情報などについては、当宮ホームページで告知いたします。どうぞ、お楽しみに。

大阪天満宮社報
天満てんじん　新春号外
令和七年十二月二十五日印刷
令和八年元旦発行
発行人　寺井種治
発行所　大阪天満宮社務所
〒530-0041
大阪市北区天神橋二―一―八
TEL〇六―六三五三―〇〇二五
印刷所　木村印刷株式会社